

# 清兵衛の剣

——藤沢周平の武家小説——

安藤 勝志

はじめに

藤沢周平（一九二七—一九九七）はそのエッセイ「自作再見」（『ふるさとへ廻る六部は』）の中で、「制約のない人生などどこにもなく、人は社会や家、肉親のしがらみに縛られている」と述べ、その武家小説に登場する主人公たちに「藩という枠をはめ、身分や役、家といった」制約を課している。こうした色彩の色濃い作風は短編集『隠し剣孤影抄』・『隠し剣秋風抄』が原点である。このいわゆる「隠し剣シリーズ」と呼ばれている短編集は大衆文芸誌『オール读物』の昭和五十一年十月号から昭和五十五年七月号にかけて断続的に十六編、『別冊文藝春秋』の昭和五十四年春季号に一編発表された。このシリーズについて、作者の藤沢は深い愛着をこめて、前掲のエッセイに「ここには私のこのあとの武家小説に共通する微祿の藩士、秘剣、お家騒動、といった要素がすべて顔を出し、私の剣客小説の原型をなしている」とその特色を記している。

この隠し剣シリーズの系譜につらなる作品が短編集「たそがれ

清兵衛」（新潮社、昭和六十三年刊）の作品群である。この作品群は昭和五十八年から昭和六十三年にかけて文芸誌『小説新潮』に断続的に連載された。その作品は「たそがれ清兵衛」（昭和五十八年九月号）・「うらなり与右衛門」（昭和五十九年十二月号）・「ごますり甚内」（昭和六十年七月号）・「ど忘れ万六」（昭和六十一年二月号）・「だんまり弥助」（昭和六十二年七月号）・「かが泣き半平」（昭和六十二年九月号）・「日和見与次郎」（昭和六十三年一月臨時増刊号）・「祝い入助八」（昭和六十三年六月号）の八編である。これらの作品は「微祿の藩士、秘剣、お家騒動」という隠し剣シリーズの三要素を継承発展させつつ、各編の主人公である剣客たちの人物像をより人間的に形象化することを重視したものとなっている。

## 1 「たそがれ」と呼ばれた男

藤沢周平の武家小説、その秘密の扉を開く第一の鍵は「微祿の

藩士」という語にある。武家小説集『たそがれ清兵衛』の巻頭を飾る作品が作品集と同題の「たそがれ清兵衛」である。主人公の名を井口清兵衛という。清兵衛は勘定組に属する五十石の平藩士である。三十石の御蔵役である「祝い人助八」の主人公伊部助八や四十五石の普請組である「ど忘れ万六」の樋口万六の家柄に比較すれば、清兵衛は、石高も上であり、勤務もデスクワークであり、恵まれているといえはいるが、百石の右筆である「うらなり与右衛門」の三栗与右衛門（ただし、実家の内藤家は六十石の作事方）や百石の馬廻組である「だんまり弥助」の杉内弥助の家柄と比較すれば、決して恵まれているとはいえない。作者のいう「微禄の藩士」の典型である。微禄の藩士、清兵衛の日常は中小企業サラリーマンのそれと重なる。薄給のサラリーマン生活、その哀歎、ささやかな家庭生活の不幸、それは中小の業界紙の記者であった作者の体験や取材の間に垣間見た現実の光景でもあったにちがいない。

井口清兵衛は藩中で「たそがれ清兵衛」と呼ばれている。本来、「たそがれ」は黄昏時、夕暮れの意味であるが、ここでは下城の時を待ちかねたように早く帰宅する清兵衛を揶揄したものである。つまり、この異名は清兵衛の勤務態度からつけられた蔑称である。しかし、清兵衛にも事情がある。清兵衛は病妻を抱えており、妻の介護や家事のため早く帰宅しなければならないのである。その上、内職にも励まなければならぬ。その疲労ゆえか、勤務中の職場でも、算盤を手に居眠りをすることもあるらしく、同僚

の評判はよくない。「たそがれ清兵衛」という呼称は同僚の陰口でもあるのだ。同僚も清兵衛の置かれている立場は理解しているはずである。しかし、「ひととは他人の美を見たがらず、むしろ好んでその醜を見たがるもの」（「うらなり与右衛門」）であり、陰口は人の世の常でもあるのだ。ただ、清兵衛は勤勉な勤め人とはいえないが、無能な勤め人ではないようである。もし、清兵衛が無能で怠惰な勤め人であるならば、勘定組をお役御免になっているか、藩を追われているはずであるが、清兵衛は依然として勘定組に勤めているのである。それは清兵衛の隠れた才能や誠実な人間性が上司や同僚にも、ある程度は理解されているからであろう。腹心の部下である寺内権兵衛、大塚七郎と上意討ちの密談中、家老の杉山頼母でさえも「感心な者じゃな。病妻をいたわって、仲ようしておるのはよろしい」と口にしていくくらいである。もっとも、その直後に清兵衛の勤務態度を聞き、「ほめて損をしたというように、おもしろくない顔」をしたのではあるが。

清兵衛は袴をつけたサラリーマン、スーツを着た侍である。近代的なオフィスの中で、パソコンを前に働いていたとしても、何の不思議もない人物である。しかし、忠義だけの人、会社人間ではない。むしろ、家庭を愛し、妻を愛するマイホーム主義の人間である。武家の自分が主君に忠誠を尽くし、家の名譽のためにのみ生きることであれば、清兵衛は武家的な人間ではない。

このような清兵衛の人生観は清兵衛の個性にのみ起因しているわけではない。清兵衛の成育した家庭環境にも関わりがあるよう

である。清兵衛の妻について書かれた次の部分に着目したい。

妻の名は奈美である。五つのときに、両親を失つて孤児となり、遠い血筋を頼つて清兵衛の家に来た。清兵衛より五つ年下だった。ほかには子供がいなかったので、二人は兄妹として育てられ、歳ころになれば奈美は井口の家から嫁に行くはずだったが、清兵衛の両親が早く病死したために、事情が違つて来た。遺言によつて、二人は夫婦になつたのである。

ここに見られるように、清兵衛の両親は遠縁の薄い孤児を引き取つて育てたような人間であつた。家の繁栄だけを願うならば、長男の嫁は長男の出世につながる家から迎え、養女は家の繁栄につながる家に嫁がせるべきであり、それがたとえ政略結婚といわれようと、武家にとつては当然の行為であつたはずである。しかるに、清兵衛の両親は井口家の嗣子と家の繁栄にはつながりもない養女との婚姻を「遺言」しているのである。封建的な武家の伝統に呪縛されている人間にはできない行為である。清兵衛の両親は家父長制的な家の繁栄にこだわりを持たない人間であり、家庭や家族の幸福を願う人間だったのである。その家庭や家族を愛する心を、清兵衛は井口という家とともに両親から継承した人物として描かれているのである。

清兵衛にとつての妻は家庭や家族の象徴である。愛妻家の清兵衛は組屋敷のある狐町に妻と二人暮しである。妻との間に子ども

はいないが、二人の間は円満である。清兵衛は「三十半ば」の男として描かれており、妻の奈美は「清兵衛より五つ年下」と書かれているので、三十歳前後と推定できる。奈美は従順であえかなる女である。短編集「たそがれ清兵衛」の他篇に登場する女たちとは異なる女性像として描かれている。三栗与右衛門（「うらなり与右衛門」）の妻多加は「果断なところのある女子」であり、夫と夫の元上司の寡婦との根も葉もない艶聞にも、夫に対する信頼感の揺らぐことのない女性である。川波甚内（「こますり甚内」）の妻朋江は政変の余波で家禄削減の川波家を守り、「お気を落とされませぬ。いまに、よい使りもござりましょう」と失意の夫を激励するすべも心得た女性である。杉内弥助（「だんまり弥助」）の妻民乃は無口な夫とは対照的に饒舌な女であるが、弥助とは「仲むつまじい夫婦」であり、五人の子どもの母でもある。鍋木半平（「かが泣き半平」）の妻勝乃は夫の泣き言にはつき合わないが、夫の老母と二人の子どもの世話、内職にも励む堅実な女性である。藤江与次郎（「日和見与次郎」）の妻瑞江は政変の影響で家禄半減の婚家にあり、巧みに家事を切り回す女性であり、実家の長兄による藩内の派閥への誘いも夫のために拒絶する女性である。伊部助八（「祝い人助八」）の亡妻宇根は悍婦・悪妻であつたが、「家事では手落ちのない嫁」であつた。助八の恋人波津は成約した縁談を拒否し、最終的には助八に心を寄せせる女である。樋口万六の息子参之助の嫁危代の「幼児のころに両親を失い、たらい回しのようにして親戚に養われて成人した女子」という生い立

ちは奈美に近いといえる。しかし、卑劣な男に言い寄られた時は万六に救いを求めたが、日常生活では物忘れの激しい男に勝氣な口調で指図する嫁である。その点、むしろ、亀代は奈美よりは連作集『三屋清左衛門残日録』（『別冊文藝春秋』一七二号から一八六号に連載）の主人公清左衛門の息子又四郎の嫁里江の女性像に近い。多加・朋江・民乃・勝乃・瑞江・宇根・波津・亀代はそれぞれ、夫や恋人に対する情愛の表現に差異はあるが、いずれも逞しく強い女たちであり、能動的な女性像として描かれている。これらの女たちに対し、奈美だけがあえかなる女、弱者として描かれている。清兵衛の精神的支柱がなければ生きることすら危うい女である。「心身ともに夫を頼りすぎていて、このままではやがて立ち上がれない病人になるだろう」と主治医の久米六庵にもいわれるような、夫への依存度の高い受動的な女性像として描かれている。本来、作者は「したたかな女が見せる一瞬の純情」（『オーラル讀物』平成四年十月号のインタビュー）を好む作家である。しかるに、作者は何ゆえに奈美のようなあわわで弱き女性を作中に登場させたのであろうか。それは作者の潜在意識の中にある亡妻に対する負い目に理由を求めることができるのではなからうか。藤沢は昭和三十四年に三浦悦子と結婚したが、昭和三十八年、妻悦子は癌のために長女展子を遺し、二十八歳という若さで死亡している。悦子は藤沢が在職したことのある湯田川中学校の卒業生であった。藤沢の筆名「藤沢」は悦子の出身地の地名であり、「周平」は悦子の甥の名であるという。最愛の妻を失った心情、

それを藤沢は「そのとき私は自分の人生も一緒に終つたように感じた（中略）妻の命を救えなかつた無念の気持ちには、どこかに吐き出さねばならないものだった」（『死と再生』）と書いている。この妻に先立たれた悲劇とその無念さ、それがやがて藤沢に奈美のようなあわわで弱き女を描かせたのではなかつたか。現実の世界において妻を失つた藤沢の喪失感、その喪失感を埋めたいという願望、それが作品の世界において清兵衛の手を借り、病妻を病魔から必死で救済させようとしたのではなかつたか。

清兵衛の日常は病妻の介護を中心として転回している。妻の奈美は数年前に「労咳ろうがせ」にかかっている。現在の肺結核である。清兵衛は「はたして労咳か」と町医六庵の診断を疑っているが、病状は「咳が出るわけでもなく、血を吐くわけでもない」のにもかわらず、清兵衛の眼には「日に日に瘦せて行くように見える」状態である。この病妻のため、清兵衛は猥身的に尽くす。炊事・洗濯などの家事はもとより、奈美の廁通いの介抱までしているのである。その上、虫籠づくりの内職までしている。清兵衛が内職に励むのは今日の糧を得るためばかりではない。奈美の治療のため、転地療養をさせたいのである。藪医者六庵の診断は疑ってはいるが、清兵衛は「転地して、うまいものを喰わせれば、病氣は半分方なおる」という言葉だけは信用できそうに思っているからである。

清兵衛は妻のためにのみ行動しているように見える。清兵衛は家老の杉山頼母から上意討ちの仕事を命ぜられた時にも、藩への

忠誠を求められても、加増や配置がえを提示されても、それを引き受けないが、杉山の「わしの屋敷に出入りしている辻道玄に、一度診させよう。道玄は名医だぞ。労咳などは、手もなく直す」といわれ、はじめて心を動かされる。しかし、それでもまだ承諾しない。郡奉行の大塚七十郎が清兵衛の病妻の世話と上意討ちの時刻が矛盾しないように調整して後にはじめて上意討ちを承諾するのである。清兵衛は妻のためには何事も厭わない男である。上意討ち成功後、清兵衛は杉山から「妻女の養生についての援助」だけを受け、他の報償は固辞する。このことは一見清兵衛が無欲で静かなる男のように見えるが、実はなかなかしたたかな男である。清兵衛は杉山から「転地の宿を世話してもらい、医者の方をもらい、妻女の日常の世話は宿の者の手をかりず、家老屋敷に出入りしている地元の百姓の女房にやってもらっている」のである。病妻の医療費、転地療養費、介護などの費用は相当なものになるはずである。それを清兵衛は「約束だからかまわない」と思っているのである。

## 2 清兵衛の剣

藤沢周平の武家小説、その秘密の扉を開く第二の鍵は「秘剣」という語にある。清兵衛は剣客である。作品集「たそがれ清兵衛」各篇の主人公たちもすべて類まれな「秘剣」の持ち主たちである。うらなり与右衛門は「無外流」、こますり甚内は「雲弘流」、どど

れ方六は「林崎夢想流」、だんまり弥助は「今枝流」、かが泣き半平は「心極流」、日和見与次郎は「直心流」、祝い人助八は「香取流」の達人である。達人であったと過去形で呼ぶべきかも知れない。なぜなら、現在、その名声はみな蔑称めいた渾名の陰に隠れたものとなっているからである。

清兵衛は無形流の剣客である。藩内の松村道場に学び、「若いころは師をしのぐと評判があつた遣い手であつた」という。清兵衛の学んだ「無形流」は現実存在した居合の流派の一つである。「水戸藩、新田宮流の和田平助が、晩年に開創した新しい流儀で、その流の印可を出しているが、ふつうには流裔の別所左兵衛範治が、新工夫を加えて享保十二年、藩主の命で無形流と改称」（稀谷雪・山田忠史編 増補大改定『武道流派大辞典』東京コビイ出版 昭和五十三年刊）したといわれている流派である。牧秀彦は「藩士たちの剣術流派」（『別冊宝島』九六四）の中で、「藤沢周平の剣豪ものには、主人公が地方の小さな流派の遣い手であるのに対し、敵は江戸前の巨大流派の達人というパターンがしばしば見受けられる」と述べているが、清兵衛の無形流もまた傍流の剣である。

傍流の剣ではあるが、清兵衛の剣は必殺の剣である。しかし、清兵衛が伝家の宝刀をたびたび抜くことはない。清兵衛が作中で剣技の冴えを見せるのは二回だけである。まず一回目は上意討ちの場面である。

清兵衛は、ひと言堀に声をかけた。振りむいた堀が小刀に手をかけるところを、清兵衛は抜きうち斬った。軽やかな太刀さばきに見えたが、その一撃で堀は横転した。

清兵衛がみごとに体制の闇を切り裂いた一瞬の光景である。藩内体制派の首魁である堀もただ者ではない。その剣の腕は「若いころには城下の平田道場で鳴らした男」なのである。その上、堀には北爪半四郎という凄腕の護衛もいたのである。そのような状況下の上意討ちは至難の業である。並の劍客にしとげられる業ではない。清兵衛が超人的な技量の持ち主でなければ果たすこととはできなかったはずである。清兵衛が若年時に道場通いをしたことは文中に書かれているが、現在も道場通いを続けているとは書かれてはいない。また、現在、清兵衛が置かれている苛酷な生活条件を考慮すれば、道場通いは不可能に近いはずである。昼間は城中の勘定方に勤め、帰宅後は病妻の介護、家事、内職に明け暮れる清兵衛である。剣の修練に励む時間をとることなどできようはずはあるまい。修練の時間を欠き、それでもなお發揮される清兵衛の秘剣、その才能は天賦のものである。清兵衛は能ある鷹が爪を隠すように、その天賦の才能を「たそがれ」という蔑称の陰に隠し続けてきたのである。しかし、いかに伝家の宝刀といえども、時にはそれを抜かねば錆びついてしまうものだ。世に隠れた才能、時にはそれを見せねば忘れ去られてしまうものだ。幸運にも、清兵衛にはその絶好の機会が上意討ちの瞬間に訪れたのだ。

次に清兵衛がその恐るべき剣技を見せるのは北爪半四郎との対決の場である。近習組の北爪は堀将監の護衛役でもあった。「江戸で小野派一刀流を修行した男だが、藩中に彼の右に出る劍士はいない」といわれた劍客でもある。北爪が修行した「小野派一刀流」は周知のごとく伊藤一刀斎の高弟小野次郎石衛門忠明（神子上典膳）の流をくむ名流である。その北爪も堀が清兵衛に討たれた時には重職会議の主導権を握った杉山頼母に「上意討ちである」と制止され、護衛の役目を果たすことができなかつた。北爪はパトロンである堀を失い、ボディガードとしての体面も失つてしまつたのである。清兵衛が上意討ちを果たした四ヶ月後の小春日和、北爪は清兵衛を襲撃する。清兵衛が城下から小一里ほど離れた妻奈美の養生先鶴ノ木の湯宿に見舞いに行く途次の野道である。

少しずつ半四郎が近づいて来た。五間の距離に来たとき、半四郎は刀を抜いたが、清兵衛はゆるやかに足をひらいたまま、佇立をつづけている。半四郎はすべるように走つて来た。まったく無言のまま、ただ一合、二人は斬り合った。一撃で北爪半四郎は地面にのめつていた。

息詰まるような決闘の場面である。まるで西部劇の一場面を見ているようである。藤沢周平は映画鑑賞が趣味である。それは山形師範在学中に始まつている。藤沢は「わが青春の映画館」(「小

説の周辺」の中にも「私は学校の授業が終わると、この映画街に直行した。一日に一館ずつ見て、週の終わりには最初の映画をもう一度見直すというふうだったので、映画中毒のようなものだった」と連日のように山形市内の映画街に出かけていた思い出を書いてある。さらに続けて「私は戦後の西部劇の名作は、大半を見てゐる気がするのだが、時代物で剣客小説などを書いていると、よくシチュエーションが西部劇に似ているなど思うことがある」とも書いており、その作品が西部劇に影響されたとしても何の不思議もない。決闘シーンの描写も西部劇の影響であろう。決闘シーンで名高い西部劇の代表作といえばジョージ・ステイヴンス監督のバラマウント映画「シェーン」(一九五三年)である。アラン・ラッドが演じた主役シェーンは早射ちのガンマンである。敵役のジャック・パランス演じる黒装束のガンマンを〇・六秒で倒す。清兵衛も瞬時に敵役半四郎を倒す。清兵衛の剣はシェーンの拳銃と同じである。瞬時に相手を倒すことのできる剣である。藤沢作品に登場する剣客たちの多くは瞬時に勝敗のつく居合の剣を遣う。西部劇のガンマンと同じである。ただし、「祝い人助八」の主人公伊部助八と直心流の剣客殿村弥七の決闘だけは約一刻(二時間)も続く。

ある。清兵衛はたとえライバルの剣客を倒したとしても、西部劇のヒーローのように、遙かなる山の彼方へ旅立つというわけにはいかない。また、決闘そのものの社会的意味も異なるものである。シェーンの決闘は西部開拓時代のルールどおりに行われたものであり、公衆に公認されたものである。これに対して、清兵衛の上意討ちは主命による藩公認のものであるが、清兵衛と半四郎の決闘は証人となる者でない非公認のものである。いかに相手から挑まれたものとはいえ、藩の認可した公的なものではない。許されざる私闘にはちがいないのである。しかし、清兵衛は無法者ではない。無用のトラブルに巻き込まれることを避けるための智恵を備えた男である。さりげなく街道に死者がいたと水門小屋の小者から杉山家老に通報させ、その処置は事情を知る家老に任せ、その場を立ち去るのである。清兵衛は物事を現実的に処理できる冷静な男として描かれているのである。

藤沢周平の武家小説には必ずといっていいほど主人公のライバルの剣客が登場する。そのライバルは黒幕的人物の側近であり、主人公と甲乙つけがたい剣技の持ち主である場合が多い。清兵衛と半四郎もライバルである。半四郎は藩政の黒幕に組み入る者として、また名のある流派の剣客として描かれている。このような例は他の作品にもある。「だんまり弥助」に登場する主人公杉内弥助のライバル服部邦之助は政争の果てに失脚する家老に組み入る者であり、梶派一刀流の剣客である。「梶派一刀流」も小野次郎右衛門忠明の子忠常の弟子梶新右衛門正直の流れをくむ名流で

ある。作者には権威やエリートに対する嫌悪感があり、それが主人公には傍流の剣を遣わせ、ライバルには名流の剣を遣わせているのである。作者は傍流が主流を倒すことを意識的に企図しているのである。

清兵衛の秘剣は藩政の暗部を切り、ライバルを倒したが、それは思わぬ波及効果をもたらすことになるのである。清兵衛が侍としての名譽を捨ててまで介護しても回復しなかった妻奈美の病状、その病状が奇跡的に回復するのである。

村はずれの松の木の下に、女が一人立っている。じつとこちらを見たまま動かない。その白っぽい立ち姿が、妻女の奈美だとわかるまで、さほどにひまはかからなかった。

ライバルの半四郎を倒し、妻を見舞った清兵衛を、妻の奈美が出迎える場面である。奈美が独り立ちし、独り歩きを始めたのである。清兵衛の介護なしには一人で歩くことすらできなかった奈美である。奈美の病状が急速に回復したのは家老杉山の厚意、効果的な医薬や転地療養先の提供によるところも大であったにちがいない。しかし、それだけではなからう。奈美に「おまえさま、雪が降るまでには、すっかり元気になるかも知れませんよ。はやく、ご飯の支度をしてさし上げたい」と言わしめたもの、奈美の自立と積極的な生への意志を支えたもの、それは清兵衛が愛妻を守るためにとった命がけの行為にほかならないであろう。清兵衛

の剣は社会悪を切るためのみに存在したものではない。弱者を生かすための剣、活人剣でもあったのである。

### 3 剣も処世術

藤沢周平の武家小説、その秘密の扉を開く第三の鍵は「お家騒動」という語にある。藤沢が「お家」の舞台として選んだのはその故郷鶴岡にあった「庄内藩」である。藤沢は作家城山三郎との対談「日本の美しい心」(「藤沢周平のすべて」)の席上、「藩として私がいつも考えているのは、郷里の庄内藩なんです。典型的な二派相廻の歴史で、それが延々と続いていたんです」と語っている。これが藤沢作品にしばしば登場する架空の藩「海坂藩」のモデルである。藩内の「二派相廻の歴史」を描くことについては「企業の派閥争いはそんなにしつこくやらないでしょうが、相通じるところがあります」(前掲の対談)とその理由を語っている。

短編集「たそがれ清兵衛」の中の藩でも派閥抗争が描かれている。「うらなり与右衛門」では平松藤兵衛と長谷川志摩の両家老、「ごますり甚内」では栗田兵部と山内蔵之助の両家老、「だんまり弥助」では大橋源左衛門と金井甚之助の両家老、「日相見与次郎」では家老の畑中喜兵衛(実質的には組頭の淵上多門)と中老の丹羽司との藩政上の対立抗争が背景として描かれている。「かが泣き半平」では藩主の縁戚守屋采女正と藩主の信任厚い家老の鮎川助左衛門との世子をめぐる対立が描かれている。



「たそがれ清兵衛」では利権派の家老堀将監と改革派の家老杉山頼母との財政改革上の派閥抗争が背景として描かれている。派閥抗争の要因は藩の財政的危機にあった。財政危機の原因は凶作であり、その原因は異常気象にあった。しかし、時の政権はその問題を解決できず、政権交代が行われたのである。

この政権交代に乗じて組頭から筆頭家老の地位に昇進したのが堀将監であった。堀派には家老の野沢市兵衛、中老の吉村喜左衛門がいた。堀の財政改革の要点は民間の財力導入であった。領内の回漕問屋能登屋の重用である。能登屋万蔵は「千石船を二艘、五百石積み、三百石積みの船を数艘持つていて、北は松前、南は上方まで手広く諸国の産品を回し、その富は底知れないとささやかれる新興の商人」である。まず堀は能登屋から一万両を借り受けて藩庫を満たす。下級藩士の借上げ米率の引き下げがその理由である。次に能登屋の村方に対する直接融資を許容する。能登屋が藩を通さずに、直接に村方費用や種物を貸しつけることができるようになったのである。その結果は一時的な経済効果、経済の活性化をもたらすが、そこに新たな問題を派生させることにもなったのである。能登屋は「藩の苦しい台所を救った救世主であったが、そこから絶えず利を吸い上げていることでは、巨大な寄生虫」でもあったからである。堀の専横も問題であった。能登屋との官民癒着も放置できない問題であった。堀は能登屋に献金させ、海辺に別荘をつくり、豪遊を繰り返していた。堀は反対派を徹底的に弾圧していた。堀の農政を批判した郡代の高柳庄八は即日職を

解かれ、五十日の閉門処分となった。能登屋の潰れ地買収調書を作成した郡奉行の三井弥之助は辺地の代官に左遷された。能登屋からの藩の借り入れ調書を作成し、意見書を添えて藩主に上申しようとした勘定奉行下役の諏訪七三郎は書類を没収された上、家禄を半分削られ、国境の関所番に役替えとなったのである。しかも、堀は諏訪の友人の手によって届けられた書類の写しをみた藩主が激怒したと聞き、「頭が切れて気性の激しい現藩主のかわりに、性格温順な三弟を藩主に立てる画策」をはじめたのである。

このような事態を憂慮し、藩政改革を断行しようとしたのが家老の杉山頼母である。杉山は前政権の中老でもあった。杉山派には家老の成瀬忠左衛門、江戸家老の半沢作兵衛、組頭の寺内権兵衛、郡奉行の大塚七十郎がいた。杉山は半沢と連携し、堀を重職会議の場で詰問し、堀がその非を認めない場合は上意討ちにする計画を立てたのである。その上意討ちの仕手として選ばれたのが清兵衛だったのである。

この堀派と杉山派の対立は必ずしも悪と善、不正義と正義の対立とはいえないものである。なぜなら、旧政権時代、杉山派が何らかの積極的な財政改革案を提案した証しもなく、現政権発足時点では「堀の思い切った政策を息をのんで見まもっていたのだが、あえて正面から異をとなえること」はしなかつたからである。これは理想的な改革者の立場ではない。単なる傍観者の立場にすぎない。また、さらなる財政悪化を懸念し、その提案を控えていたとはいえず、杉山を含む旧執政の間にも「能登屋の財力を使って、

藩政に活を入れてみたいという欲望」もあつたのであり、民営化路線という点では堀派も杉山派も大差ないのである。杉山派も、結局のところは、忠臣という仮面の裏側に、狡猾な素顔を持つていたのである。つまり、堀派と杉山派の対立は藩内の権力闘争であるとするのが至当である。たまたま、杉山派が権力闘争の勝者となつたというにすぎないのである。さらには、片方の堀将監は社会悪のスケープゴートとして誅殺されたのであるが、片方の能登屋万蔵には「何の咎めもなく、藩とのつながりはそのままつくくことになつたようだった」とあり、これは汚職政治の根源がそのまま温存されたことを示している。これでは杉山頼母が第二の堀将監にならないという保証はどこにもないのである。

組織には権力闘争がつきものである。権力闘争は非情である。ことに敗者の末路は悲惨である。社会的地位を奪われるばかりではない。最悪の場合はその命まで奪われかねないのである。その意味では派閥に組することは賢明ではないのかも知れない。「日和見与次郎」の主人公が考える「ま、たとえば派閥に加わらないために損をするようなことがあつても、家を潰さない程度に家名を維持できれば上等ではないか」という処世観、それも生き残るための智恵ではある。ただ、それだけでは生きてはいけない。人は好むと好まざるとに関わらず、権力闘争のトラブルに巻き込まれることもあるからである。清兵衛の場合がそうである。清兵衛が上意討ちの仕手に選ばれたのは杉山派の大塚の推挙によるものであるが、それは偶然にも大塚が堀のため左遷された諏訪から清

兵衛の剣名を聞いていたからである。諏訪が大塚に清兵衛のことを話していなければ、清兵衛は権力闘争に巻き込まれることはなかつたのである。しかし、清兵衛は杉山派の同志的人物としては遇されていない。むしろ、杉山派は清兵衛の剣の腕のみを利用しては病める妻のためであつたが、もしそうでなかつたとしても、それを拒絶できたかどうか。杉山派が秘密を知る男をそのままにしておくとは考えられないからである。上意討ちを承諾した清兵衛は賢明な男である。清兵衛には危機管理上の計算もあつたのではなからうか。見事、上意討ちを果たした後も栄進は望まない。妻の療養に関する他の何一つ望まない。堀にかわる筆頭家老となつた杉山から「なおほかにのぞむことがあれば、この際だ、言え」と聞かれても、それを固辞しているのである。加増も役替えも望みのままであつたにちがいない。微禄藩士の境遇から脱出できる千載一遇の機会であつたはずである。しかるに、それを辞退するとはどういうことなのか。「実際に、ほかにほざほど望むものはなかつた」とも書かれてはいる。しかし、この一見謙虚なように見える清兵衛の姿勢、それは清兵衛の巧みな処世術ではなかつたろうか。やむなく権力闘争に巻き込まれてしまった場合においても、必要以上に権力に深入りせず、適当な距離をとつて生きるバランス感覚、それが清兵衛の処世術ではないか。権力の座はいつ覆るかかわらないのである。杉山にかわる新たな権力が台頭してくる可能性もある。現在のところ、杉山頼母は信頼

に足る人物のようである。しかし、人間はいつどのように変貌するかも知れない、それが人の世の常である。「孤立剣残月」(「隠し剣秋風抄」)の主人公小鹿七兵衛は、かつて上意討ちにした相手の弟から果し合いを申し込まれる。しかし、藩内の状況が変わり、七兵衛は誰の支援も受けることができず、一人で戦わざるをえないことになってしまふのである。本来、上意討ちは藩命であり、討ち果たした者の一族から報復を受けることはないはずである。これは理不尽な運命であるが、組織に属する人間の宿命である。だからこそ、組織の中の人間、特に組織の末端に位置する人間は常に自己を守る処世術を身につけておかなければならないのである。時の権力と対立することはきわめて危険であるが、時の権力に取り込まれてしまふこともまた危険である。権力との間に不即不離の距離を保持すること、それが組織末端の人間には最良の自己防衛術なのである。清兵衛はそのことを誰よりも知っている人間なのではないか。

権力との微妙な間合いは清兵衛の巧みな処世術であるが、清兵衛の剣もまた巧みな処世術である。政変前にはわずかな者しか知ることがなかった清兵衛の剣であったが、政変後には藩内周知のものとなったにちがいない。清兵衛は絶妙のタイミングで、その秘剣を抜いたのである。今後、たとえ権力の座がどのように変化したとしても、もはや清兵衛の剣を無視することはできないはずである。

#### おわりに

山田洋次監督の松竹映画「たそがれ清兵衛」(二〇〇二年)は、藤沢周平の武家小説集「たそがれ清兵衛」所収の作品「たそがれ清兵衛」、「祝い人助八」、短編集「竹光始末」(立風書房 昭和五十一年刊)所収の作品「竹光始末」(小説新潮)昭和五十年十一月号)の三編を原作として製作されたものである。当然のことながら、原作と映画では異なる点もある。

山田監督の意図は家族を描くところにあつたようである。映画の家族構成は小説「たそがれ清兵衛」とは異なっている。小説の清兵衛は病妻との二人暮らしであるが、映画では妻はずでに病死し、痴呆症の老母、十歳の長女と五歳の次女との四人暮らしとなっている。そのため、映画では小説で描かれている清兵衛と妻との夫婦愛の部分は欠落し、清兵衛の家族に対する思いやりに重点がおかれている。

清兵衛の華やかさのない人生に色彩を添えるためであろうが、映画では小説「たそがれ清兵衛」には描かれていない清兵衛の恋人が登場する。その清兵衛の淡い恋の対象である恋人の人物像は小説「祝い人助八」から借用したものである。しかし、その名は「祝い人助八」では「波津」となっているが、映画では「朋江」となっている。「朋江」は「こますり甚内」の妻の名と同じである。

映画における清兵衛の殺陣シーンは二回あるが、それはいずれも小説「たそがれ清兵衛」のものではない。他の作品の決闘場面を借用したものである。一回目は小説「祝い人助八」の伊部助八が親友の妹につきまとう前夫を打ちのめす部分を使用している。二回目は小説「竹光始末」の小黒丹十郎が余吾善右衛門を上意討ちにする部分を使用している。ただし、小黒の流派は清兵衛の無形流、助八の香取流とも異なり、「戸田流」である。戸田流の小太刀は室内の闘争に適している。映画でも清兵衛に小太刀を遣わせている。この清兵衛と善右衛門の室内における長時間にわたる死闘はリアルではあるが、ややスピード感には欠けるものである。時代劇特有の洗練された殺陣シーンとは言いがたいものであるが、この殺陣シーンには、たとえ上意討ちであったとしても、つまりまるところはどろどろとした殺し合いにすぎないという監督の強いメッセージが感じられる。

#### 注

①本文の引用は株式会社文藝春秋刊『藤沢周平全集』（平成四年から平成六年に刊行）による。

②参考文献は文中に記したとおりである。

（あんど・かつし 浜松大学教授）